

私たちはすでに主を信じていて、新しいのちを持っています。しかし、私たちの多くの習慣は相変わらず主を信じる前と同じです。そればかりでなく、品格も性質も主を信じる以前とやはり同じです。

このような生まれながらの性質や品格、習慣はこの新しいのちを表現することはできません。そのため人が私たちに会っても、なかなか新しいのちに触れることができないのです。

往々にして、人が私たちを通して触れるものは、生まれながらの人であって主ではありません。あなたという人は、あるいは非常に聡明であるかも知れません。しかしそれはやはり生まれながらの聡明さなのです。あなたにはあふれるばかりの情熱があるとします。しかしそれもやはり生まれながらの情熱です。あなたは人に出会うとき、とても温厚な人だと感じさせます。しかしこれもやはり生まれながらの温厚さです。あるいはあなたは、非常に感覚の鋭敏な人かも知れません。しかしそれも生まれながらの鋭敏さなのです。

つまり、人の生まれながらの状態では、人を主に触れさせることは難しいということです。

ですから主は、私たちが救われた後、私たちの上で二つの事をなさいます。

まず第一に、主は私たちの生まれながらの習慣や品格、性質を打ち砕かれるということです。ただこのようにすることによってのみ、キリストのいのちは私たちの上から自由に現れることができるのです。もし、砕かれることがなければ、主のいのちは天然のいのちにさえぎられて、現れ出ることはしないでしよう。

そして第二に、聖霊は私たちの中に新しい性質を造り込み、新しい品格を造り込み、そして新しい生活と習慣をもたらしてくださるということです。

主は単に私たちの古いものを打ち砕かれるだけでなく、さらに新しいのちの組織を私たちの中に造り込まれるのです。ただ消極的に取り壊すだけでなく、積極的に造り込んで下さるのです。この二方面のことを、神は私たちが救われた後に、私たちの上でなさるうとしておられるのです。

一、神がなさるのです

多くの人は主を信じてしばらくすると、自分自身は砕かれなければならないことを知ります。そして色々考えた末、自分流の方法で、生まれながらの性質や品格、また過去の習慣を取り壊そうとします。しかし神が私たちを砕くには、最初にまず私たちの「人の働き」を砕かれるのです。

兄弟姉妹たちよ、私たちは多くの時、人の働きで造り上げた性質や品格、また習慣を打ち砕こうとします。しかし、それは無益であるばかりか、かえって面倒になるばかりです。確かに私たちは、過去の一切はどうしても打ち砕かれなければならないというを見なければなりません。しかしそれを自分の力で取り壊す必要はないのです。

何故なら、人の働きで取り壊すことは、外面の装飾にすぎないからです。それはかえって霊的命の成長を妨げてしまいます。ですから自分自身で砕くのではなく、神に砕いていただくのです。

このことは神ご自身がなさるということ、はつきりと知っておかねばなりません。これは神がなさるのであって、私たちが何か方法を考え出して自分自身を対処するものではありません。神は、私たちが自分の方法を捨てて、すべての働きを主の御手の中に置くのを待っておられるのです。これは基本的な原則であり、私たちはこのことをはつきりと認識する必要があります。神がもし私たちを憐れんで下さるなら、御手を下して私たちの上にみわざを実行してくださるでしょう。

神は私たちに有益な環境を用意して私たちの外なる人を砕かれます。神は私たちがどれだけ砕かれる必要があるかをご存じです。また私たちのどういう所が特に固くなっているのか、どんな所が砕かれなければならないのかを知っておられます。

私たちにせつかな所があるかも知れませんが、頑固で融通の利かない所があるかも知れません。でもそれは神だけがご存じであって人には分かりません。自分自身でさえ分かりません。ただ神だけが私たちのすべてをお見通しなのです。ですから神にしてください以外なのです。

説明の便宜上、神が外側で私たちを砕き、内側で組織してくださるその働きを、ここでひとまず「聖霊の管理」と呼ぶことにします。なぜなら、私たちの遭遇する

ことは神の計らいですが、その計らいの意味を解釈して、私たちに教えてくれるのは聖霊だからです。神の計らいは外側のことですが、聖霊はこの計らいを翻訳して、私たちの内なるものとし、それを私たちの身の上に応用します。

このように外側のことを内側のもに变化させる働きを、私たちは聖霊の管理と呼びます。そればかりでなく、事実上、神が環境を計らうのは聖霊によってなされるのです。

神は直接私たちの遭遇する環境を計らうのではなく、神の霊によってなされるのです。主の昇天から再臨までのこの時代は聖霊の時代ですから、今日神がみわざをなさるのは聖霊によつてです。聖霊は環境の中で働かれますし、また神の子たちの内側でも導きの働きをします。使徒行伝には、聖霊が促すとか、聖霊が許さないとか、聖霊が禁ずるといった箇所がたくさん出てきます。聖霊が外なる環境を計らうことや、今述べた内なる促し、不許可、禁止などを全部含めて「聖霊の管理」と呼びます。要するに、聖霊の管理とは、外と内において神が私たちを管理するという意味です。

この管理は道や導きの上ばかりではなく、性質の上にも品格の上にも実行されます。なぜなら私たちの内にはすでに新しいいのちがあり、すでに神の霊があります。神は私たちに何が必要であるか、どんなことに遭遇すれば最も適当であるかを存知だからです。

聖霊の管理、すなわち聖霊によって神は私たちの必要に応じて適当な環境を用意なさいます。それによつて私たちの上に打ち砕く働きと、組織し込む働きを行います。ですから聖霊の管理は、私たちの天然の（生まれながらの）性質や天然の習慣を打ち砕くことです。またそればかりか、私たちの中に聖霊を織り込ませ私たちを成熟させ甘くさせます。

私たちの環境は神の計らいによるものです。私たちの髪の毛も全部数えられています。もし私たちの父が許さなければ一羽のすずめさえ地に落ちることはできません。ましてや私たちの遭遇する環境など当然のことです。他人のきつい言葉や、いやな顔、順調に進まぬ事柄や、達せざる望み、突然襲う病、親しい人との離別、愛する人の死、こういった一切のことはみな父なる神の許しの下にある事柄です。

順調であろうとなかろうと、また健康であろうと病氣であろうと、喜びであろうと

と苦痛であろうと、私たちに臨むすべての事柄はみな神の許可を経て来たものなのです。

神は環境を用意することによって、私たちの古い品格や性質を砕き、そして新しい品格、新しい性質を私たちの内に造り込もうとしておられるのです。神が私たちに必要な環境を起こされると、私たちはその環境の中で、知らず知らずのうちに外側が砕かれていきます。そして内側は聖霊によって次第に組織され、神のような品格や性質を持つようになります。このようにして神は、神に似た品格や性質を一日と私たちの身の上から現してくださるのです。ですから、私たちはひとたび主を信じたならば、次のことをはつきりと認識しなければなりません。

まず第一に、私たちは砕かれる必要があります、また建造される必要があるということです。第二は、自分の手を下して砕くのも建造するのでもなく、神が私たちに環境を用意して砕き、かつ建造するということです。

二、神はどのようにして環境を取り計らうのでしょうか

それでは神はどのようにして私たちのために環境を用意してくださるのでしょうか。私たちはそれぞれ性質や生活が異なっています。習慣も同じではありません。ですから私たちに必要な神の砕きも同じではありません。神が私たちを管理なさるとき、その取り計らいもそれぞれ異なるのです。ですから各人が遭遇することはどれも同じではありません。夫婦は最も親しい間柄です。しかし神の彼らに対する取り計らいはそれぞれ違います。父と子、母と娘も親密な間柄ですが、神の彼らに対する取り計らいも決して同じではありません。神が私たちの環境を取り計らうとき、神は私たち一人一人の必要を見て与えてくださるのです。

神の按配（取り計らい）は、どの一つを取ってもその中に教育的な目的が含まれています。

ローマ人への手紙八章二十八節には

「神は、神を愛する者たちと共に働いて、万事を益となすようにしてくださる」とあります。万事とは、すべていっさい、という意味です。いっさいの事は、神が按配してくださったもので、それは私たちの益となるものです。

ですから何一つとして、突然私たちに臨むものはありません。その境遇が偶然であるということはありません。万事、すべての事はみな神が按配なさったものです。

私たちが会おう出来事は複雑で入り混じっています。ですからその事に内在する意味を見出すことはとても難しいのです。どうしてこのような事が起きたのか理解に苦しみます。ところが神の御言葉によれば「万事すべての事は相働いて私たちの益となる」と言っています。いったいどんな出来事が、どのような益を私たちにもたらすのでしょうか。どれだけのことに会えば、どれほどの益となるのかも私たちに分かりません。

しかし、私たちはただ一つのことを知っています。つまり「すべての事はみな私たちの益となる。私たちの益とならないものは何一つない」ということです。

そして特に知らなければならぬことは、神の按配は私たちの内にやがて聖い性格を造り上げるということです。私たち自身が聖い行いをするのではなく、神はこういった按配を通して、私たちの内に聖い性格を造ってくださるのです。

「神は：共に働いて、万事を益となすようにしてくださる。」(ローマ八・二八)
とはどのような意味なのか、一つの比喻によって説明してみよう。

杭州は織物の産地で、機織り工がたくさんいます。彼らが織っているのを背後から見ると、縦糸や横糸があつてさまざまな色彩が入り混じっています。素人には何を織っているのかちつとも分かりません。しかし織り上がると、人物や、花びらや、山水があつたりしてとても美しいのです。彼らが織っている時には、何が何やらさっぱり分かりません。ただ一本の糸が行ったり来たりしていて、そこに赤い糸や緑の糸があるだけです。

それと同じように、私たちの遭遇することも、私たちの目から見れば全く理解不可能です。

いったい神はどんな花を織ろうとしているのか理解できません。しかし、神は私たちの一本一本の糸を管理しておられます。どの糸にも、どの色にも、どんな図案にも、それぞれも用途があり、何らかの意味があつてそこに用意されているのです。

神が私たちの環境を按配なさるのは、とりもなおさず、私たちを聖い性格に造り上げたためなのです。私たちが会おう一つ一つの出来事は、それぞれみな価値があります。私たちは今、その価値を理解できないかも知れません。しかし、ある日

それがはつきりと分かる時が必ず来ます。当時その事が、たとえ苦しくて嫌なことに感じられても、時が過ぎて振り返ってみると、主がなぜ何のためにこのようになさったのかが分かるのです。

三、私たちの取るべき態度

では私たちがこれらの出来事に遭遇したとき、どのような態度を取るべきでしょうか。ローマ人への手紙八章二十八節では万事が共に働いて、神を愛する者のために益となると言っています。言い換えるならば、神がことをなさるとき、私たちは自分の益とならせることもできるし、またその益を阻むこともできます。

つまりそれは私たちの態度と大いに関係があるわけです。遅かれ早かれその益を受けることになるのですが、それは私たちの態度いかんにかかっているのです。私たちの態度がもし正しければ、直ちに益を被ることができます。

もし私たちが神を愛する者であるなら、神から出たものはいっさい私たちの益となります。人が自分で選択したり、自分のために要求したりするものが少しもないなら、つまり完全に神が与えてくださるものを喜ぶ人であるならば、その人はただ一つの心、神を愛する心があるはずで、神を愛する人であるならば、どんなに込み入ったことがあると、愛の中で組み立てられ、その人の益となるのです。

私たちが何か事に遭遇するときに、私たちの内側で神を愛することをしないで、自分のために、自分の欲望のために神を求めるなら、また神の他に自分の嗜好があるなら、神が私たちに下さる益はすべて無駄となってしまう。私たちは多くの事でよく不平をもらします。不服を言います。愚痴をこぼし、ため息をつきます。

兄弟姉妹よ、たとえ万事が共に働いても、私たちの心が神を愛するものでなければ、決して私たちの益となることはないでしょう。このことをしっかりと覚えてください。

これを知らないために多くの神の子供たちは、多くの按配がなされているのにも関わらず、彼らはそこから豊かな結果を得ていません。

これはほかでもなく、彼らには神以外に他の目的があるからです。彼らの神の前における心は柔軟でないからです。神の愛を感じないために神を愛さないからなの

です。彼らの態度が正しくないのです、彼らがどんなに多くの対処を受けても霊の中には何も残らないのです。

願わくは神の憐みにより、ひとたび主を信じた私たちが心から神を愛する道を学ぶことができますように。

知識が乏しいことは問題ではありません。なぜなら神を知る（得る）道は愛にあるのであって、知識によるのではないからです。あなたがもし神を愛するならば、たとえ知識が少なくてもやはり神を知ることができます。どんなに多くのことを知っていて、心で神を愛していなければ神を得る助けとはなりません。詩歌の中にも良い歌詞があります。

「人がもし神を得ようとするならば、『愛』にまさる道はない」

人がもし、真に神を愛するならば、たとえどんなことに遭遇しようと、それはやがてみなその人の益となるでしょう。私たちの心は神を愛することを学ばなければなりません。

もし神の御手を見ていなければ、事あるごとに他人と問題を起こしてしまいます。まずあなたはあの人が悪いと感じます。まるで彼らが何か意地悪な方法で自分をあしらっているかのように思われるのです。私たちはよく兄が悪いとか弟が悪いなどと言います。自分以外の誰か、姉や妹、両親や友人が悪いと感じます。そんなとき、私たちは落胆と失望以外に何も得られことはありません。教会の兄弟姉妹が悪いと思われ、あれもこれも間違っていて、すべてが悪いと感じるとき、不満と批判以外に何も得るものではありません。

もし、「あなたの父が許さなければ一羽のすずめも地に落ちることはない」という御言葉を認識するなら、しかもそれが神から出たということを確認するなら、私たちは神の御手の下に服することができましょう。そして益を得ることでしょう。

詩篇三九篇九節に

「私は黙して口を開きません。あなたがそれをなされたかれました。」とあります。

これが神に服従する態度です。この事は神がなさったが故に、この事が私の身の上に臨むのを神が許可したが故に、そしてこの事は私の益となるためであるが故に自然に服従します。それが「黙して口を開かない」ということです。

私は自分の境遇を見て、なぜあの人のようでないのだろうとは言いません。なぜ

なら心で神を愛しているからです。そしてそれらの事は神の御手であると知っているからです。

「ただ黙して口を開きません」こうして神が私たちの身の上で何かを成し遂げてくださるのです。それは一方で碎き、一方で造り込む（組織する）みわざです。

それでは、サタンから来たものまでも受け入れることになりはしないかと、尋ねる人はいるかも知れません。この問題に関する基本的な原則はこうです。神が許可したものの対しては、私たちはあくまでも服従します。しかしサタンから来た攻撃に對しては抵抗するのです。

四、碎かれることと組織されること

主は私たちを、毎日多くのことに遭遇させますが、私たちの好きなことに会わせることは極めてまれです。ですから聖書はこう命じています。

「あなたがたは主にあって、いつも喜びなさい」（ピリピ四・四）

主以外に私たちを常に喜ばせ得るものは何一つありません。では、なぜ神は私たちの思うようにならない境遇に会わせるのでしょうか。主の目的はどこにあるのでしょうか。言うまでもなく、主の目的は、私たちの天然のいのちを碎くことにあるのです。

この点についてはエレミヤ書四十八章十一節を読めば理解できると思います。

「モアブはその幼い時から安らかで、酒が、沈んだおりの上にとどまって、器から器にくみ移されなかったように、捕え移されなかったので、その味はなお存し、その香気も変わることがない。」

モアブはロトの子孫です。（創十九・三十六・三十七）またアブラハムとも関係のある人です。しかし彼は肉に属する人です。彼は幼い時から安らぎだけを求めて、苦難を経験したことはありません。試練や攻撃を経験したり、苦悩や苦痛を経験したことなどほとんどありません。彼に涙を流させたり、心痛を与えたりするものはありません。彼には思い通りにいかない事は一つありません。神はこのようなモアブを何のようだと言われたのでしょうか。

「酒が沈んだおりの上にとどまって、器から器にくみ移されなかったようだ。」と言われたのです。なぜなら、静止している時はその表面はきれいに澄んでいます、

しかし底にはかすがたまっていて、動かせばすぐに濁ってしまいます。完全に澄ませるためには、その酒を「器から器にくみ移す」必要があるのです。

昔は酒を造るとき、濾過機というものがないので、酒をこちらの器からあちらの器へと移し変えることによってかすを取り除きました。もともと酒とかすは混ざり合っていますが、やがてかすは沈殿します。その澄んだ酒を、こちらの器から別の器へ移し変えることによって、かすと区別するのです。とは言え、かすもやはり酒と一緒にわずかながら移ります。そこでまた別の器へ移します。こうしてかすが完全になくなるまで、何度も何度も移し変えられなければなりません。ところがモアブは一度も器から器へ移されたことがないのです。ただ酒がかすの上で澄んでいるように、彼のかすは少しも取り除かれていません。

そこで「彼の味はなお存し、その香気も変わることがない。」と言われているのです。

モアブの味は本来のモアブのままであり、モアブの香に過ぎません。彼の元来の状態が今日もそのまま残っているのです。しかし、彼は元のままの味ではなく香りに変化のあることを求めておられるのです。

ある人は主を信じてすでに十年になります。しかし主を信じた頃の雰囲気があるまま残っています。ちょうどモアブと同じように、その味はなお存し、その香気も変わっていないのです。ある人は主を信じた当時、物事をいい加減に済ませる人でした。そして二十年過ぎた今もやはりいい加減にするのです。またあるクリスチャンは、かつてわけの分らない人でした。そして今もやはりそのような人なのです。人の生まれながらの味がなお存し、その香気はいまだに変わっていません。神はこれを必要としていません。

神は私たちの生まれながらの習慣や品格、性質を打ち砕きたいのです。

神は私たちを何度も、こちらの器からあちらの器へと移し変え、またあちらの器からこちらの器へと移し変えて、私たちのかす、生まれながらの味を取り去ろうとなさるのです。

モアブの歩いた道は順調でした。しかし彼の「味はなお存し、その香気も変わることが」なかったのです。

今日私たちが歩いている道は、モアブのように順調でなく、「幼い時から安らか

ではないかも知れません。あるいはパウロの言っているように、「多くの苦難を経なければならぬ」(使徒十四・二十二)ものであるかも知れません。しかしこれこそまさに、主がここで私たちのかすを除去し、私たちの生まれながらの味を取り除くうとしておられることなのです。

主は私たちが再び自分の味や生まれながらの香気を漂わせぬようになることを望んでおられるのです。古いものは必ず砕かれなくてはなりません。主は私たちを根こそぎに引き抜こうとしておられます。

主はあなたをこちらの器からあちらの器へ、またあちらの器からこちらの器へと移すでしょう。主はあなたの為に、今日これを按配し、明日はあれを按配します。主はあなたをこのような環境からあのような環境へと移すでしょう。

主が按配された環境によって、あなたの外なる人が砕かれていきます。

そのとき、自然にあなたの生まれながらの味は失われ、生まれながらの香りが消え失せていきます。あなたの生まれながらの味が、一度、また一度と消えていく度に、昨日のあなたは今日のあなたと異なり、今日のあなたと明日のあなたとでは、また少し違っていくのです。

このようにして主はあなたの外なる人を、今日少し砕き、明日少し砕いていくのです。

そしてあなたのかすが取り除かれ、あなたの生まれながらの味がなくなり、古い香りがすっかり変わるまで続けられるのです。

神は私たちの身の上で、単に消極的に砕く働きをなさるだけではなく、積極的に主を組織し込むみわざをなさいます。

私たちは、創世記に記載されているヤコブの一生の物語の中から、その「組織」仕込むとは一体何であるかを見ることが出来ます。

ヤコブという人の始まりはとても低いものでした。彼は母の胎内にいるとき、すでに兄と争い、生まれる時には、先を争って兄のかかとをつかんでいました。

「そのあとで弟が出てきたが、その手はエサウのかかとをつかんでいた。それでその子をヤコブと名付けた。イサクは彼らを生んだとき六十歳であった。」(創二十五・二十六)

彼は狡猾で欲が深く、あるとあらゆる手段で人をあしらいました。そしてあくま

で自分に有利になるように事を運びました。彼は自分の父親をだましただけでなく、自分の兄をもだまし、さらに自分の叔父をも欺きました。しかし、彼自身も叔父に欺かれ、自分の子供にだまされました。彼は極力自分を発展させようとしたが、しかし結局かれは飢餓の中へと落ち込んでいきます。要するに、ヤコブという人の歩いた道は極めて苦しいものであったと言うことができます。ある人は愉快な人生を送ったのに、ヤコブは苦難の一生を送ったのです。

彼がこれらの事を経過している時、私たちはただ神が彼の外なる人を一度砕き、二度砕き、そしてずっと砕いておられるみわざを見るのです。ある時にはこの事に出会わせ、またある時には別のことに遭遇させます。しかもそれはいつも困難なことばかりです。しかし神に感謝します。神は彼にこのような多くの困難を経験させました。

そして彼がエジプトに行った時には、すでに神の聖さに触れた人となっていました。

私たちはそこに、柔和で謙虚で、靈的に明るく、莊嚴な人を見ることができます。彼は自らの子供に恵みを求め、あわれみを請うほどに柔和で謙虚な人になっていました。

このことは、生まれながらあのように低級であったヤコブが神に砕かれたゆえに、ついに神に用いられる人となり、ついに神の人となったことを私たちに見せてくれます。

ヤコブはこのように多年にわたる砕きを経験しました。その結果、神は彼の中にこのように多くのものを組織し込んだのです。

彼は臨終にあたって、杖の頭にすがって神を礼拝しました。彼は病床にあつて、杖にすがりながら神を礼拝したのです。これは、彼がなお自分が人生における旅人であることを忘れず、旅人の性質を失っていないことを明らかに表しています。

彼は初めは無理に座し

「ある人がヤコブに告げて『あなたの子ヨセフがあなたのもとにおいでです。』と言ったので、イスラエルは力をふりしぼって床に座った。」(創四十八・二)

足をベッドの下に下して預言をし、預言を語り終えた後、足を床の上におさめて

息絶えました。

「ヤコブは子らに命じ終わると、足を床の中に入れ、息絶えて自分の民に加えられた。」(創四十九・三十三)

彼のこのような死は本当にすばらしいものでした。これは一枚の、とても美しい絵のようです。

さてヤコブの一生を細かく振り返ってみましょう。

生まれた時の彼の性質は、おそらくどんな人にも見られないほどの悪いものでしたでしょう。しかし、彼が世を去る時には、完全に生まれながらの味を見ることはできません。見えるのは、ただ完全に神の御手の中で、神に組織された人だけでした。

私たちが遭遇するすべての事は、知らず知らずの内に私たちを造り上げていきます。

神はさまざまな苦難によって、私たちを砕きます。しかもその砕き方はかなり厳しいものです。しかしそれらの苦難を乗り越えるとき、私たちの内側に組織される働きがなされます。

苦難が臨む時、それは私たちを打ちのめしてしまひそうです。しかし神の恵みは、必ずその苦難を乗り越えさせます。そして私たちが乗り越えているとき、私たちの内側に組織する働きがなされているのです。

こうして一つ一つの苦難を乗り越え、その度に一つ一つ私たちの内側に主が組織仕込まれていくのです。

神は一面、私たちを極めて厳しい苦難に会わせ、それによって私たちを砕きます。そして一面、私たちがそれを通過するとき、神は私たちの内側に「自身を組織仕込まれるのです。

神に感謝します。私たちは聖霊の管理を受けている者です。

願わくは、聖霊の管理によってさらに私たちが砕かれますように。

私たちの内に「自身を組織仕込み、私たちを成熟した段階に導かれますように。

アーメン